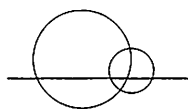


〈論文〉



## 東亜同文書院の中国語教育について

愛知大学非常勤講師 石田卓生

はじめに

1901年（明治34）から1945年（昭和20）まで上海で教育活動を行った東亜同文書院は、その教育課程の指針を示した「立教綱領」において、「日本学生。以清英言語文章。及中外制度律令。商工務之要。〔日本の学生には、清英の言語文章、及び中外の制度律令、商工務の要を以てす。〕」<sup>1</sup>、「特課此輩以清国言語文章。制度律令商工務之要。〔特に此の輩に課するは清国の言語文章、制度律令と商工務の要を以てす。〕」<sup>2</sup>、と繰り返し述べているように中国の「制度律令」「商工務」を学ぶことと共に「言語文章」すなわち中国語教育を重視していた。

学内では中国語教科書『華語萃編』が学年毎に初集から四集まで編まれ授業で使用されていたし<sup>3</sup>、中国語についての教育、研究雑誌『華語月刊』<sup>4</sup>

が刊行され、さらに未完成に終わったものの戦後刊行された愛知大学『中日大辞典』<sup>5</sup>へとつながる辞典編纂の活動も行われていた<sup>6</sup>。

その卒業生たちは、外務省内で「支那ニ於テ殊ニ対支第一線ニ於テ活動スル機関ノ中堅層中同文書院出身者ノ如何ニ多キヲ占メ居ル」<sup>7</sup>、と報告される活躍をみせたが、その際に東亜同文書院で学んだ中国語が大きな力となっていたことは想像するに難くない。

そうした中国語の使い手を養成した東亜同文書院の中国語教育については、学校の制度や組織という側面からの研究や<sup>8</sup>、『華語萃編』『華語月刊』という教材の研究などから<sup>9</sup>、戦前期における日本の主要な中国語教育機関の一つとして位置づけられるなど一定の評価を得ている<sup>10</sup>。しかし、教育課程や教材は学校から学生に与えられる学習環境なのであり、その把握がそのまま授業などの学

<sup>1</sup> 「立教綱領」松岡恭一編『日清貿易研究所東亜同文書院沿革史』（上海、東亜同文書院学友会、1908年）40頁。尚、〔……〕内は引用者、また旧字体は新字体に改めた。以下同様。

<sup>2</sup> 前掲「立教綱領」、44頁。

<sup>3</sup> 『華語萃編』初集、1916年初版発行、1917年再版、1919年3版、1921年4版、1925年訂正5版、1927年訂正6版、1928年訂正7版、1930年訂正8版、1931年9版、1933年10版、1934年11版、1935年12版、1936年訂正13版、1938年14版、改訂版初集1940年17版（東亜同文書院大学華語研究会発行）、改訂版初集1942年全訂版（大同書院発行）、改訂版初集1942年18版（東亜同文書院大学華語研究会発行）、改訂版初集1943年19版発行（東亜同文書院大学華語研究会発行）。このうち内容についての改編は、1925年訂正版、1940年改訂版、1942年全訂版（大同書院発行）である。『華語萃編』二集、1924年初版、1925年再版、1926年3版、1930年訂正4版、1931年訂正5版、1933年改訂6版、1934年7版、1935年8版、1938年9版、1940年訂正11版、1942年訂正12版、1944年訂正13版。『華語萃編』三集、1925年初版、1932年版、1934年再版、1933年改訂版、1935年再版、1938年3版、1939年4版。1937年に第6版が出たとも伝えられるが詳細不明『東亜同文書院大学史』（渥友会、1982年、268頁）。『華語萃編』四集、1933年初版、1934年再版、1938年3版、1939年4版、1940年5版。

<sup>4</sup> 『華語月刊』、東亜同文書院支那研究部華語研究会、1928-1943年。東亜同文書院の研究機関支那研究部の中国語専門部署である華語研究会によって発行された中国語研究、教育雑誌。同研究会会員である中国語教員による論文をはじめ、東亜同文書院の試験問題、解答を掲載した。



習実態をあきらかにするものではないだろう。

本文では、先行研究であきらかにされてきた東亜同文書院の教育環境の中で、教員がどのように中国語を教授していたのか、また学生がどのように学んでいたのか、といった中国語教育の実態を考察する。

## 1. 北京官話教育

東亜同文書院に学び、卒業後に母校の中国語教員となった鈴木沢郎<sup>11</sup>は、東亜同文書院の中国語教育とそれを取り巻く上海の言語状況について次のように語っている。

〔東亜同文書院で学んだ中国語を上海で使う機会は——引用者〕あまりなかったね。しかしわれわれは標準語、北京語でやればね、たいていわかってくれるんだからね。向こうからの言うのがわからないわけ<sup>12</sup>

鈴木の後輩であり同じく母校で教壇に立った坂本一郎<sup>13</sup>も同様のことを述べている。

只町のことは上海語等の方言一色で北京語は一度も聞いた事がなく、その点甚だ物足りなかった。外部で北京語に近いことが聞けたのは、“官話福音堂”だけで、語り手は外人の宣教師、その中国語の流暢さ

と熱意には今でも頭が下がる。<sup>14</sup>

このように東亜同文書院で教えられていた中国語は、学校所在地の上海では話されていない北京官話であった。1937年（昭和12）、東亜同文書院の北京移転が検討された際、外務省当局が上海と北京を比較して、「北京ハ支那語習得ト支那文化研究ニハ便利ナル」<sup>15</sup>、と述べているように、中国のただ中で中国語を学べるといっても、上海にあることは北京官話学習についてのみえば殊更優れた立地とはいえなかったのである。

では、北京官話を教育することにとって最適とはいえない上海で、どうして東亜同文書院は活動したのだろうか。

東亜同文書院の直接の前身は南京同文書院である。1900年（明治33）5月南京に開校したが、義和団事変の騒乱を避けるため同年8月には上海に移り、翌年5月上海南郊の高昌廟桂墅里に新校舎を開いた。これが同年8月に改称して東亜同文書院となった。

南京同文書院の規模は小さく、準備された科目は中国語、時文（中国の現代文語）、英語、法律学、経済学だけであった<sup>16</sup>。その中国語教育について、学生であった内藤熊喜は次のように述べている。

秀才の王という南京の人が毎日二時間語学を教えた<sup>17</sup>

<sup>5</sup> 愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』中日大辞典刊行会、1968年。

<sup>6</sup> 東亜同文書院では1933年（昭和8）から中国語辞典編纂を目指し、鈴木沢郎、熊野正平、野崎俊平、坂本一郎、影山魏、岩尾正利、内山雅夫、山口左熊、木田弥三旺、金丸一夫、尾坂徳司と中国人講師8名によって井上翠『井上支那語辞典』（文求堂書店、1928年）を下敷きにしつつ語彙蒐集が行われ、日本敗戦時には語彙数7-8万語、約14万枚のカードとなっていた。戦後、それら資料は中国に接収されていたが、1954年（昭和29）に文化交流の一環として日本中国友好協会を通じて愛知大学へ付託され、同大の『中日大辞典』編纂に利用された（鈴木沢郎「編者のことば」前掲『中日大辞典』）。

<sup>7</sup> 「東亜同文書院北支移転問題ニ就テ」2. 一般（16）同文書院ヲ北京ヘ移転問題 昭和十二年十二月」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015340900（第11画像）東亜同文書院関係雑件第四巻（H.4）（外務省外交史料館）。

<sup>8</sup> 六角恒廣『中国語教育史論考』不二出版、1989年。邵詭「近代日本における中国語教育制度の成立」『神戸大学発達科学部研究紀要』第12巻第2号、2005年。

<sup>9</sup> 今泉潤太郎「東亜同文書院における中国語教学」（『愛知大学国際問題研究所紀要』第103号、1995年）、松田かの子「官話教科書『華語萃編』の成立に関する一考察」（『藝文研究』第80号、慶應義塾大学、2001年）、同「『華語月刊』と東亜同文書院の中国語教育」（『藝文研究』第88号、2005年）。

<sup>10</sup> 六角、前掲書、84頁。

王が南京人であったとするような記述に注目すれば、ここで教えられていたのは北京官話でなかった可能性が生じる。このことについて、東亜同文書院の初代院長根津一<sup>18</sup>は学生の中国語学習状況を報告する中で興味深いことを述べている。

第一期生〔南京同文書院々生——引用者〕ノ支那語ノ教授ハ南京ニテ一応官話ヲ練習シタル上之レヲ土台トシテ北京官話ヲ練習セルガ為メニ其進歩甚ダ遅々タリシガ第二期〔東亜同文書院第1期生——引用者〕ヨリハ清語教師ハ総テ満洲人ヲ北京ヨリ傭聘シテ之ガ教授ヲ為サシメタレバスクノ如ク大進歩ヲナシタルナリ<sup>19</sup>

なまじ南京で「官話」つまり南京官話を習ったがために、かえって「北京官話」学習に支障をきたしたということは、南京同文書院では北京官話が教えられていなかったことを示す。前掲内藤の回想とあわせて考えれば、そこでは南京官話が教えられていたのであろう。

しかし、当時の日本における中国語教育とは北京官話を教えまた学ぶことであった。

江戸時代から明治初期にかけて日本人が学ぶ中国語といえば南京官話のことであったが、トーマス・ウェードの北京官話教科書『語言自邇集』(1866年)の登場以降、北京官話が外国人の学ぶ標準的

な中国語となる傾向が強まり<sup>20</sup>、日本においても1876年(明治9)東京外国語学校で北京官話教育がはじめられるようになると南京官話教育は急速に廃れていったのである。こうした情勢の中で、南京官話を教授する南京同文書院の中国語教育は当時の主流から外れるものであったといえる。

しかし、南京同文書院の中国語教育は、1900年5月に第二代院長に就任した根津の下で校舎を上海へ移した時期に北京官話へと切り替えられた。前掲の根津による東亜同文書院学生の中国語学習状況の報告とあわせて考えると、この転換には根津の存在が大きく関わっていたと思われるし、また彼がかつて運営に参画していた日清貿易研究所(1890-1894)が、やはり上海において北京官話教育を行っていたことから、その影響を受けたことが推測される。

この日清貿易研究所は、中国での諜報活動経験もある荒尾精<sup>21</sup>によって設立された対中国貿易の実務者養成を目的とした商業学校である。当然、中国語習得が重視されており、陸軍派遣で北京に留学した経験をもつ御幡雅文<sup>22</sup>が北京官話を教えた。この研究所において上海では話されていない北京官話が教えられることになったのには二つの要因が考えられる。

一つには、荒尾、根津、御幡といった幹部が陸軍関係者であったということである。陸軍内では北京官話が教えられていた。例えば、御幡自身が

<sup>11</sup> 鈴木沢郎(1898-1981)栃木県出身。東亜同文書院第15期生、商務科。東亜同文書院教授、同大学教授を経て愛知大学教授。戦後、愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』(中日大辞典刊行会、1968年)の刊行に尽力した。

<sup>12</sup> 前掲「鈴木沢郎氏に聞く」愛知大学五十年史編纂委員会編『大陸に生きて』風媒社、1998年、24頁。

<sup>13</sup> 坂本一郎(1903-1996)大分県出身。東亜同文書院第20期生、商務科。東亜同文書院教授、同大学専門部教頭。戦後は神戸市外国語大学教授、関西大学教授として中国語教育に従事した。

<sup>14</sup> 坂本一郎「自叙」『中国研究-経済・文学・語学』久重福三郎先生坂本一郎先生還暦記念行事準備委員会、1965年、165頁。

<sup>15</sup> 「在支邦人教育機関設立ニ関スル件」『2. 一般(16)同文書院ヲ北京へ移転問題 昭和十二年十二月』JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B05015340900(第89画像)東亜同文書院関係雑件第四巻(H4)。尚、北京移転問題に関しては、拙文「東亜同文書院の北京移転構想について」(『中国研究月報』第63巻第2号、中国研究所、2009年)を参照のこと。

<sup>16</sup> 『東亜同文書院大学史』滬友会、1955年、22-23頁。

<sup>17</sup> 「内藤熊喜回想記」大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史』滬友会、1982年、81頁。

<sup>18</sup> 根津一(1860-1927)。甲斐の人。陸軍軍人(最終階級少佐)、教育家。陸軍士官学校旧4期卒業後、陸軍大学校第3期入学(中退)。日清戦争従軍後、東亜同文会幹事長と東亜同文書院院長を兼任した。

<sup>19</sup> 「春季大会記事」『東亜同文会報告』第68回、1905年7月26日、45-48頁。

<sup>20</sup> 高田時雄「トマス・ウェードと北京語の勝利」狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』、京都大学学術出版会、2001年。



陸軍の中国語教官であり、荒尾はその教え子である<sup>23</sup>。そうした彼らにとって北京官話は教えるべき中国語として選択肢の第一となったであろう。二つ目は、彼らが方言の混在する中国での北京官話がもつ汎用性を理解していたと考えられる点である。荒尾は北京官話を学んだ後に中国現地で活動していたし、御幡はまず南京官話を学んだ後に北京官話へと転じたという学習歴をもっており<sup>24</sup>、共に身を以て中国の言語状況を体験しているのである。

そして、彼らと日清貿易研究所を運営していた根津が、そこでの経験を東亜同文書院運営にいか

すことに不自然さはない。このことは、科目設定からもうかがい知ることができる。前述したように南京同文書院が準備した科目に商業系のものはなかったが、それに対して「日清貿易研究所第1学年学科予定表」と「東亜同文書院3年制学科課程表」「東亜同文書院4年制学科課程表」に示したように商業に関わるものが設定されている<sup>25</sup>。中国語教育についても、根津は東亜同文書院に御幡を招聘しているし、その他にも高橋正二<sup>26</sup>、青木喬<sup>27</sup>という日清貿易研究所卒業生が中国語教員となっており、やはり日清貿易研究所の影響をみることができる。

<sup>21</sup> 荒尾精（1859-1896）。尾張の人。陸軍軍人（最終階級大尉）、教育家。陸軍士官学校旧第5期。陸軍参謀本部より派遣され中国に入り情報収集任務にあたり、後に上海に日清貿易研究所を開設した。日清戦争直後の台湾に渡るが病死した。

<sup>22</sup> 御幡雅文（1859-1912）。長崎出身。東京外国語学校漢語学科、陸軍参謀本部派遣北京留学。熊本鎮台や上海の日清貿易研究所の中国語教員と務め、日清戦争の従軍通訳、台湾総督府翻訳官を経て三井物産上海支店勤務。前掲「内藤熊喜回想」（92-93頁）、六角「御幡雅文 上海の語学の達人」（『漢語師家伝』東方書店、1999年、168-169頁）、罇沢彰夫「御幡雅文伝考」（早稲田大学中国文学会『中国文学研究』第26期、2000年）、同「御幡雅文伝考拾遺」（『中国文学研究』第27期、2001年）。

<sup>23</sup> 井上雅二『巨人荒尾精』佐久良書房、1910年。

<sup>24</sup> 六角恒廣「御幡雅文——上海の語学の達人」『漢語師家伝』東方書店、1999年。

<sup>25</sup> 「日清貿易研究所生徒第1学年予定表」「東亜同文書院科目表」。ともに松岡恭一編『日清貿易研究所 東亜同文書院沿革史』（東亜同文書院学友会、1908年）に基づき作成した。

<sup>26</sup> 高橋正二（1870-1936）福岡県出身。1886年福岡県立久留米中学校卒業、東京英学校、日清貿易研究所で学ぶ。通訳官として日清戦争従軍。三井物産合名会社香港支店勤務を経て東亜同文書院、久留米商業学校、九州帝国大学、九州医学専門学校で中国語を教える（中村彰夫「在清見聞録」第一経済大学経済研究会編『第一経大論集』第9巻第1-2合併号、1979年）。

<sup>27</sup> 青木喬。福岡出身。日清貿易研究所に学ぶ。日清戦争中は清国内で諜報工作に従事した（『東亜同文書院大学史』滬友会、1982年、264頁）。

日清貿易研究所生徒第1学年学科予定表

【日清貿易研究所東亜同文書院沿革史】(上編 43-44 頁) より。

	前半季学年				後半季学年			
	前期	一週時間	後期	一週時間	前期	一週時間	後期	一週時間
清語学	会話口授	12	会話口授	12	会話口授	12	会話口授	12
英語学	綴字 読本 会話口授	6	綴字 読本 会話口授 習字	6	会話 習字	6	会話 作文 書取	6
商業地理	亜細亞ノ部	3	亜細亞ノ部	3	支那ノ部	3	支那ノ部	3
支那商業史	太中古ノ部	3	太中古ノ部	3	中世ノ部	3	中世ノ部	3
簿記学	単式	2	単式	2	単式	2	複式	1
和漢文學	読書 輪講	1	読書 輪講	1	読書 輪講	1	読書 輪講	1
作文	通信文 記事文	2	通信文 記事文	2	報告文 契約文	1	報告文 契約文	1
商業算	和算	3	和算	3	洋算	2	洋算	2
経済学							経済原論 貿易論	1
法律学							法律原論 日本商法	1
習字	楷書	1	楷書	1	楷書	1	行書	1
商務実習			日清両国 度量衡用法 日清貿易品研究	3	日清貿易品研究 日清各種商業ノ 組織及営業ノ方 法	6	研究所模形ノ実 践、商会ノ実習	8
臨時講義	貿易上ノ心得	1	貿易上ノ心得	1	貿易上ノ心得	1	貿易上ノ心得	1
柔術体操	古式 兵式	6	古式 兵式	6	古式 兵式	6	古式 兵式	6
		40		43		44		48 *

\* 後半季学年後期一週時間の合計は「47」となるが、本表では原文のまま「48」と記した。

東亜同文書院 3 年制学科課程表 (1908 年)

(数字は各科目一週あたりの時間数)

『日清貿易研究所東亜同文書院沿革史』(下編 54-58 頁)より。

政治科				商務科			
	1 年	2 年	3 年		1 年	2 年	3 年
倫理	1	1	1	倫理	1	1	1
清語	11	10	10	清語	11	10	10
英語	7	7	7	英語	7	7	7
清国政治地理	2			清国政治地理		2	
清国商業地理		2		清国商業地理	2		
法学通論	2			法学通論	2		
経済学	2	2		経済学	2	2	
財政学			2	財政学			2
憲法		2					
				経済政策			2
				商業学	1	2	2
民法		2		民法		2	2
				商品学	2		
				清国商品学		2	
刑法		2					
商法			2	商法			3
国際公法			2				
国際私法			1				
				国際法			2
行政法			2				
近代政治史	2						
清国近時外交史			2				
				商業算術	1	1	1
				簿記	1	1	1
清国制度律令	2	2	2	清国制度律令	2		
漢文	1	1	1				
				清国近代通商史		2	2
漢字新聞	1	1	1	漢字新聞	1	1	1
漢文尺牘			1	漢文尺牘			1
	31	32	34		33	34 *	37

\* 商務科 2 年一週授業時間合計は「33」となるが原文のまま「34」記した。

備考 政治科、商務科ともに上記科目以外に「実地修学旅行」が課せられている。また、上記以外に「政治学」が課せられていたようである(『日清貿易研究所東亜同文書院沿革史』下編 68 頁)。

## 東亜同文書院 4年制学科課程表 (1921年)

【東亜同文書院大学史】(渥友会、1982年、132-133頁)

〔総時数〕欄以外の数字は各科目一週あたりの時間数)

	1年		2年		3年		4年		総時数	
	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期		
倫理及哲学概論	1	1	1	1	1	1	1	1	4	
憲法及法学通論	2	2							2	
民法			2	2	2	2			4	
商法							3	3	3	
国際法							2	2	2	
経済原論第一部	1	1							1	
経済原論第二部							2	2	2	
商業政策							2	2	2	
貨幣論						2			1	
統計学					2				1	
商業通論	2	2							2	
銀行及金融					2	2			2	
外国為替					2				1	
交通論			2	2					2	
保険論			2	2					2	
商工経営					2	2			2	
貿易実務							2	2	2	
簿記	3	3	1	1	2	2			6	
会計学							2	2	2	
商業算術	1	1	2	2					3	
珠算	1								0.5	
商業地理	4	4							4	
商品学			3	3					3	
支那制度律令	1	1							1	
支那経済事情					2	2	2	2	4	
支那史	1	1	2	2					3	
支那時事問題研究							1	1	1	
心理及論理学						2			1	
漢文	1	1	1	1	1	1	1	1	4	
支那時文及尺牘			2	2	2	2	2	2	6	
支那語	9	9	9	9	6	6	6	6	30	
英語	5	6	5	5	6	6	5	5	21.5	
体操	2	2	2	2	2	2	1	1	7	
選 択 科 目	工業政策				2	2			2	
	取引所論				2					
	倉庫論						2			
	支那経済史					2	2			
	商工心理						2			
	社会学					2			2	
	経済学史							2		2
	殖民政策							2		
	財政学							2		
	工業概論									2
支那思想史							2	2		
商事関係法								2		
計	34	34	34	34	40	40	40	40	136	

## 2. 中国語教育の実態

中国語教育が重視されていた東亜同文書院の教育課程においては、当然それが占める割合はきわめて高かった。このことは開学時の一週の総授業時間の三分の一程度を中国語が占めていたことから窺い知ることができる（前掲学科課程表参照）。しかし、それだけでは授業の実態をつまびらかにすることはできない。授業時間数の多少は制度上の事柄であり、そこで実際どのような教育がなされていたのかという内容まではとらえることはできない。

1915年（大正4年）に入学した鈴木沢郎は、1年では同校編纂の『華語萃編』初集、2年では中級者向けの『官話指南』、3年では上級者向けの『北京官話談論新篇』を教科書として用いたと言<sup>28</sup>、その授業の様子については次のように語っている。

語学だけじゃなかったですかねえ、〔第15期生一学年103人を——引用者〕二組にわけたのは。〔中略〕中国語は、中国人の先生と、日本人の先生が、必ず二人一緒に来たですね。中国人の先生は読むだけでね、一年生の場合。二年生になると中国人の先生がだいたい講義するんです。意味を説明してくれて、それを日本人の先生がもう一べん訳す。それから今度は、その後四年制度ができてからは、四年生に対しては、日本人は説明しないんですね。<sup>29</sup>

この教授法は、最上級生に対して中国語を使っ

て中国語を教えていることから目標言語（学習対象の言語）を教える際に媒介語（学習者の母語）を用いない直接法（Direct Method）的なものであったようにみえる。

一般に直接法はヒアリングやスピーキングの機会が比較的多くとれるものの語彙や文章の意味が正確に伝わりにくいとされる。これを補うため媒介語による解説が加えられる手法がとられることがあるが、中国人教員と日本人教員が協力して授業にあたる東亜同文書院はまさにそのような手法をとっていたのである。

この東亜同文書院で中国語を学んだ人物に魚返善雄<sup>30</sup>がいる。彼は中国語を学び始めた頃の感想を次ように述べている。

はじめて耳にしたとき、そのあまりに音楽的な調子に面くらわされた中国の話しことばにも、17、8の若いたましいと柔軟な運動神経はすなおについてゆくことができた。だが、なんとまあ設備のわるい語学分野であろう。有るものはただ素材としての会話を漢字で記録した教科書ばかりである。それらを、清朝生き残りの“秀才”とか“監生”という老先生が、アヘンの切れかかった声で読みあげてゆくのであった。<sup>31</sup>

校名こそあげていないものの、「17、8の若い」とあることから、彼が東亜同文書院に入学した当時のことを述べていると思われる、文中の教科書には彼が東亜同文書院で使った『華語萃編』初集が含まれているに違いない。『華語萃編』初集には文法に関する記述はなく、たしかに会話の素材

<sup>28</sup> 前掲「鈴木沢郎氏に聞く」、23-24頁。尚、東亜同文書院は1901年入学の第1期生から1920年（大正9）入学の第20期生までは3年制、専門学校に昇格した1921年（大正10）の第21期生から4年制となっている。

<sup>29</sup> 同註、23-24頁。

<sup>30</sup> 魚返善雄（1810-1966）。大分出身。第26期生（中退）。言語学者、中国文学者。東大などで中国語を教えた。在学中より中国語に優れていたようで、当時の魚返について坂本一郎は、「2年生で実に流暢に話す学生がいたが、その人が後年若くして東京で有名になった魚返善雄博士であった。」（坂本、前掲文、172頁）と述べている。桜木敏光『東大万年講師魚返善雄文学博士の生涯』（2006年）に詳しい。

<sup>31</sup> 魚返善雄「三十三年華語夢」『書報』5月号、極東書店、1958年。





東亜同文書院の授業風景（『東亜同文書院卒業写真帖』第25期、1929年）  
中国語の授業風景であろう。教壇の中国服姿が中国人教員、洋服姿が日本人教員と思われる。

集以上のものでないが、それは『官話急就篇』と  
いった戦前の日本の中国語教科書全般にみられる  
ものであり『華語萃編』初集だけの問題ではない。  
ここで東亜同文書院自体の問題として注目される  
のは、魚返が中国人教員に対して好意的とはいえ  
ない感想を抱いている点である。「読み上げてゆ  
く」だけの姿は、まるで今日の音声教材の役割し  
かなかったかのようである。

鈴木や魚返と同じく卒業後は中国語教育に従事  
することになった坂本一郎は、卒業直後の中国語  
の力を次のように自己評価している。

中国語は聞くことと話すことと読む方には

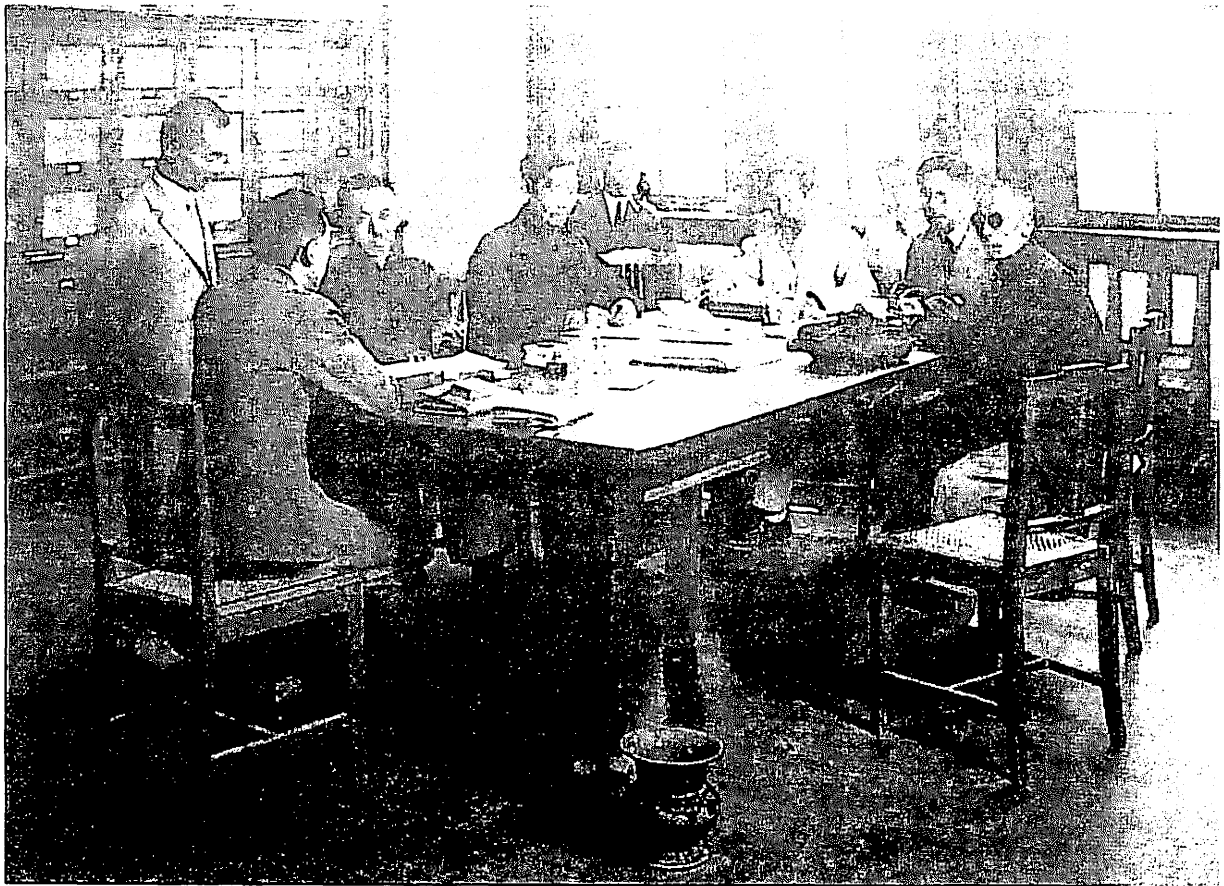
一応自信があったが、語学的に考えて見る  
とわからぬことばかりで、英語のリーダー  
の巻一を中国語に訳そうとしても、それさ  
えできなかった。<sup>32</sup>

坂本は在学中に弁論大会で中国語の演説をし  
たり、卒業時には一流銀行への学校推薦をうけたり  
した優秀な学生であり<sup>33</sup>、その中国語は東亜同文  
書院中国語教育の成果の典型とってよい。その  
ような彼が、中国語について「聞く」「話す」「読む」  
はできるものの「語学的」にはわからない、とは  
一体どういうことなのであろうか。

東亜同文書院の中国語教育を考える上で、『華

<sup>32</sup> 同註、170頁。

<sup>33</sup> 坂本、前掲文、168-169頁。



東亜同文書院教職員室（『東亜同文書院卒業写真帖』第25期、1929年）  
中国服姿の中国人と思われる教員と洋装の日本人と思われる教員たちが見える。

語萃編』、『華語月刊』といった教材や関係者の回想とともに参考となるのが試験問題である。試験は普段の学習成果を測るために行われるのであり、当然そこには授業でのねらい或いはその実態があらわれるだろう。

この学校の中国語の試験問題は昭和期のものが残っており<sup>34</sup>、それをみるに全学年とも「日語華訳」「華語日訳」「黙写」という出題形式が基本となっていた。「日語華訳」は日本語を中国語に訳すもの、「黙写」は予め提示され覚えておいた中国語の文章を書くものである。もう一つの「華語日訳」は聞き取った中国語を直接日本語に訳すという形式をとっていた。東亜同文書院の出題問題

を収録した『支那語試験問題解説』<sup>35</sup>には次のように紹介されている。

本院に於ける華語日訳試験の方法は、聞取即訳にして、原文を文字に表はして訳さしむるが如き方法を採らず、希くは読者諸氏此点に留意し、本書中の問題を見てその難易を即断さるるが如きことなく、出来得べくは、聴取の方法によりて、更に一段の玩味習熟あらんことを。<sup>36</sup>

『支那語試験問題解説』には、「華語日訳」問題と「日語華訳」問題がそれぞれ「初級上編」「初

<sup>34</sup> 東亜同文書院の中国語試験の一部は、東亜同文書院華語研究会編『支那語試験問題解説』（上海、1938年）と『華語月刊』（第3、4、10、11、13、15-16、30-31、34号）に収録されている。

<sup>35</sup> 東亜同文書院華語研究会編『支那語試験問題解説』東亜同文書院支那研究部、1934年初版、1938年再版。

<sup>36</sup> 前掲『支那語試験問題解説』、凡例1頁。

級下編」「高級編」の難度別に収められているが、ここでは各編の第一問と最終問の二問ずつを引く。

〔華語日訳〕

(初級上編)

【一】

這既是頭等房，別の屋子自然是比這個還不濟了，我們還是將就着住這兒罷；若不然，到別家去看看罷。

〔註〕

○「既是」一であるからには、例「既是這麼樣兒，咱們再想別的辦法吧」。

○「還不濟」は「還不如」、まだ劣つてゐる。

○「將就着」間に合はして、がまんして。

〔訳〕

これが上等の室だといふからには他の室は勿論これには及ばないだらうから、吾々はがまんしてここにとまらう。さうでなければ他の家へ行つて見やう。<sup>37</sup>

【六二】

那间屋子，因为是坐南朝北，所以在冬天，一點陽光也得不著，非常的冷，並且也陰的很。

〔註〕

○「坐南朝北」南側に在つて北向きに建てられたる家。

○「陰的很」大變に陰氣である、この「陰」はこの場合去声に読む。

〔訳〕あの部屋は北向きだから、冬はチツとも日が当たらずに馬鹿に寒く、その上非常に陰氣だ。<sup>38</sup>

(初級下編)

【六三】

若看高大的樓房，熱鬧的街道，買賣的興旺，上海本是一個頂好的地方兒；但看綁匪強盜鬧的利害，人情的輕佻，倒是一個頂壞的地方兒。

〔註〕

○「利害」といふ意味の場合「害」を重く読む。

〔譯〕

利害は必ず相連つてゐるものです、何事にせよ利があれば害を伴つて居ります、人は利害を見分けられれば結構です。<sup>39</sup>

【一五九】

歐洲近代文明最大的原動力，可以推原於產業革命，就是舊生產方法的破壞與新生產方法的成立。

〔訳〕

欧州近代文明の最大の原動力は産業革命すなはち旧生産方法の破壊と新生産方法の成立と云ふことに帰することが出来やう。<sup>40</sup>

(高級編)

【一六〇】

他的性格兒太蔦乾了，遇見甚麼急事，他自己有他一個老準兒似的，每每就把事情給耽擱的不能辦成；再者與人定約，往々失信，回頭人家一說他，他還這麼一拉大皮子；甚而至那份兒煙不出火不燼的，就連個響屁也放不出來。

〔註〕

○「蔦(nien1)乾」グツな、はきはきせぬ。「蔦」は草等がしほれる事。

○「老準兒」きまり、是非せねばならぬきまり。

<sup>37</sup> 同註、1頁。

<sup>38</sup> 同註、30頁。

<sup>39</sup> 同註、31頁。

<sup>40</sup> 同註、88頁。

- 「耽擱」後らせる、やりしくじる。
- 「説他」彼を叱る、彼に小言を言ふ。  
例「別嚷々、看爺々説你一喧ましく言ふな、お爺さんから叱られるよ」
- 「拉大皮子」厚かましく知らん顔をする、恬として恥じぬ風をする。例「沒想到他那麼樣兒的人，會拉大皮子進跳舞場—あんな人が厚かましくもダンスホールに這入つ行くと、ほんとに意外だ」。
- 「煙不出火不燼的」はつきりせぬ様子、例「你怎麼問他，他總是煙不出火不燼的，不說句乾脆的話—君がどんなに尋ねた所で、煮へたような煮へんような風で、はつきりした事を言はぬ」
- 「響屁也放不出來」音のする屁も屁らぬ、はきはきせずうんともすんとも言はぬ、例「怎麼罵他，放佛聽不見似的，不放響屁」

[訳]

彼の性格はあまりグツで、何か急な事が起つても、自分にはせねばならぬきまりがあるかのように、何時も事が手おくれになつて、駄目になる。其の上人と約束すると、よく約を違へ、後に小言をいふと、例の恬として知らん顔をし、酷い時には煙も出さず火も尽えぬようなはつきりせぬ態度で、うんともすんとも言はない。<sup>41</sup>

## 【二五〇】

翻開中國歷史，你就知道：除去三皇五帝的神話時代，那朝不是四不像的惡政府，可真沒有

一個青天白日的日子了。本來一個國家與其社會是並行發達的；惟獨在中國の場合則不然，國民們都嚐到了苛斂誅求，淫威逼人，毫不眷念民生的好滋味，可就漸漸兒的民心離反，無形之中相傳了一種各人自掃門前雪，與政治不關痛癢的心。像這宗人聚集而造成的社會，自然具有一種自力本願的心。所以中國的國家雖然始終反覆他的歷史毫無進步不是？可是他的社會，以獨立來排擊障礙，居然能夠日新月異的發達，發揮種種特殊性來：這可值得去研究的一點了吧。

[註]

○「四不像」鹿に似た一種の獸の名。学名を麇といふ。馬でもなし、牛でもなし、驢でもなし、鹿でもない、といふ所からこんな名を付けられたもの、これより「得体の知れぬ」「似てもつかぬ」といふ意味に用ひられる。

○「好滋味」此場合は反語的の使ひ方で、辛い目、苦い味、苦い経験といふ意。

○「淫威逼人」淫りに暴威を振つて人を压制する。

○「各人自掃門前雪」「休管他人瓦上霜」と続く成語。(前題参照)<sup>42</sup>

○「不關痛癢痛癢を感ぜぬ、如何ならうと自分等の知つたことではないとして無関心である。

[訳]

中国の歴史を翻いて見れば、直ぐ判る如く、三皇五帝の神話時代を除いては、何れの朝(明朝、清朝等という場合の朝、時代)と雖も一つとして得体の知れぬ悪政府ならざるはなく、真に一日も太平の日なき有様である。本来一つの国

<sup>41</sup> 同註、89-90頁。

<sup>42</sup> 「各人自掃門前雪、休管他人瓦上霜」。あげられている参照箇所には、「各人自ら門前の雪を掃き、他人の屋根の上の霜に構ふなど言ふ我々支那の古い諺は、自分に関係の無い事にはあまり取り合ふなど教えたものである。」(前掲「支那語試験問題解説」、166頁。)とある。

家と其の社会は並行して発達するものであるが、唯独り支那に於ける場合は左様でない、即ち国民共は苛斂誅求、暴威権力の压制、毫も民生を顧みざる（悪政）といった憂目を嘗め尽くして来た、そこで漸次に民心は離反して、無形の中に各自自己を守るべし政治には我関せず焉といった気持ちを相伝へたのである。此の如き人の寄聚つて形造つて居る社会は、自ら一種自力本願の気持を持つものである。故に支那の国家は始終その歴史を反覆して、毫も進歩を見せぬではないかと言はれるが、その社会は、独力を以つて障礙を排撃し、意想外にも日進月歩の発達を続け、種種なる特殊性を発揮してゐる、此点真に研究するに値する所であらう。<sup>43</sup>

【日語華訳】

（初級上編）

【一】

品物はまあいゝ方だが、只値段が少し高い。

【註】

- 「まあいゝ方だが」—「倒還不錯」
- 「只」—「就是」「不過」「只是」。
- 「値段が高い」—「價錢貴」、「價錢大」。

【訳】

東西倒還不錯，就是價錢大一點兒。<sup>44</sup>

【五九】

値段が高ければ高い程品物がよいとは限らぬ。

【註】

- 「とは限らぬ」は「不一定」「不能說」

「說不定」等を用ひてよい。

○「値段が高ければ高い程……」は「東西也是越好」。

○以上を綴り合せて「不一定價錢越……」とも「價錢越貴，不一定東西也越好」、「價錢越貴的，不一定東西也是越好的」の如く「不一定を中に入れても」又は「價錢越貴……那是說不定的」の如くしても意義は大体同じである。

【訳】

不一定價錢越貴的，東西也是越好的。<sup>45</sup>

（初級下編）

【六〇】

教室の窓より見える左の支那語（口語）

- 1、そら。2、洋館。3、煙突。4、塀。5、森。
- 6、木の枝。7、木のこずえ。8、木のみき。9、木の葉。10、野菜。11、農作物。12、墓。13、池。
- 14、れん瓦。15、屋根。16、家の棟。17、のき。
- 18、窓。19、村。20、壁のすきま。

【訳】 1、天。2、洋房。3、煙筒。4、牆。

- 5、樹林子。6、樹枝兒。7、樹梢兒。8、樹挺兒，樹幹。
- 9、樹葉兒。10、青菜。
- 11、莊稼。12、墳。13、水池子。14、磚。
- 15、房頂兒。16、房脊。17、房簷兒。
- 18、窓戶。19、村莊兒。20、牆縫兒。<sup>46</sup>

【一六五】

常節は何と云つても宣伝の世の中ですから、そんなに大仕掛けにやつたら或は世間から大いに受けるかも知れない。

【註】

- 「常節」は「現在這個時候」。
- 「何つと云つても」は「無論怎麼說」。

<sup>43</sup> 前掲『支那語試験問題解説』、166-168頁。

<sup>44</sup> 同註、169頁。

<sup>45</sup> 同註、192-193頁。

<sup>46</sup> 同註、194頁。



○「大いに受ける」は「受熱烈的歡迎」。

[訳]

現在這個時候，無論怎麼說，也還是甚麼都得仰賴宣傳的能力了；所以他這麼大規模的一辦，或者要受社會上熱烈的歡迎也不一定呢。<sup>47</sup>

(高級編)

【一六六】

やるならやるし、やらんならやらんで止しちまへ、何の為にさうやる様なやらん様なハツキリせぬことばかり言つてゐるんだ。

[註]

○「やるならやるし、やらんならやらん」は「若辦就辦，要不辦就不辦」(此場合或は「拉倒」、又は「吹」、「取消」などを用ふるもよい)

○「ハツキリせぬことばかり言ふ」も「竟說」の次に「含糊」「含混」「含々混々」「模糊」「曖昧不明」「摸稜兩可」……的話」或は「半推半就的不乾脆的話」など如何様に譯すもよい。

[訳]

若辦就辦，若不辦就拉倒，爲甚麼竟說那樣兒半推半就的不乾脆的話呢？<sup>48</sup>

【二五〇】

西欧の權利義務觀念が基礎になつて了つた今日では、外交と言へば直に條約を想はせる、條約さへ締結すれば、仮令それが如何に實情に即しないものでも、又は如何に不利益なものでも、或いは反つて將來に禍根を残すものであつても、その外交は成功したかに見做される。四圍の狀勢が如何に変遷しても仮令條約の不自然性不備を暴露しても、

一途に旧約を株守せむとし、或はそれが條約では解決出来ない問題であつても、強ひて條約に依つてのみ解決しようとする為、反つて問題を紛糾激化せしめ、解決困難に陥ることが多い、然も尚條約に拘泥することが當然視される。従つて學者も亦外交の糟粕たる、條約の羅列と詮索とに没頭するのみである。然し外交といふものは必ずしもそんな型に箝つたものではない。

[註]

○「株守する」は「墨守」、「株守」。

○「羅列」は「羅致」色色方方から蒐めて來るといふ意故、『羅』だけの意で『列』の意は無いが支那語としては、此の場合むしろ此の方が當る。(『羅列』『羅致擺列』。等は此處では使へぬ)。

○「詮索」は「追索」、「追求」

[訳]

在這個西歐の權利義務觀念成爲基礎的現代，一提外交就要聯想條約；就是牠怎麼樣的不合乎實情。何等不利益，於將來反要留下禍根的，只要能訂條約，人都視爲這場外交算是成功的似的；四面的形勢就是如何變遷，一個條約即便露出牠的不自然性和不完備的缺點來，他們還要一味的墨守舊約；有時發生一件事不能按照條約來解決的，他們還要勉強辦，反倒將事糾紛激化，以致往往落得解決困難；尚且人都以爲這樣拘泥條約是理之當然的；因此一般學者也要埋頭苦幹的去羅致追索所謂外交糟粕的條約；然而外交這一事未必這麼合乎固定的形式了。<sup>49</sup>

先にみたように東亞同文書院では直接法的な教授法が採られていた。一般的に媒介語を用いない直接法は、「翻譯をしないので、目標言語で考え

<sup>47</sup> 同註、247 頁。

<sup>48</sup> 同註、248 頁。

<sup>49</sup> 同註、316-317 頁。

る習慣ができる。」<sup>50</sup>とされているが、聞き取りを重視しつつも中国語自体ではなく日本語への即時翻訳を行う「華語日訳」によっても評価を行うことから、あくまで日本語で考えることを主としている傾向をうかがうことができる。つまり、東亜同文書院のそれは今日いうところの直接法とはねらいが大分異なっていたといえよう。

このような授業においては、教科書を「読みあげてゆく」だけの中国人教員に対して、その日本語訳を示す日本人教員の果たす役割は大きなものとなる。しかし、当の鈴木自身の評価は、「初学者にいていねいな説明をするというような点においては、だいぶ配慮が欠けてると思うんですがね。〔中略〕現在とはやっぱり、教え方も粗雑だった」<sup>51</sup>ときわめて低い。このことについては、鈴木、坂本、魚返と同じく東亜同文書院卒業後に中国語教師となった石田武夫<sup>52</sup>が次のように述べている。

教科書の初集を丸暗記していなければ、二年生から四年生までの、中国系の先生の中国語による教科書の講義がまるで理解できなかった。理解できない時は、中国系の先生の傍らにおられる日系の先生に聞けばよいようなものだが、実際問題として限られた時間内では、そうしたタイミングは見つけ出せなかったものである。<sup>53</sup>

ここにあらわれる授業の光景は、教員が一方的に講義していくものであり、くわえて日本人教員と中国人教員の連携は決して良いとはいえない。

東亜同文書院の中国語の授業とは、中国語で「考える」ことを促したり、また訓練したりするよう

なものではなく、教科書や教員が提示するさまざまな表現をひたすら覚えていくというものである。それは、坂本が「聞くことと話すことと読む方」について自信を抱いたように、実用的という点においては大きな効果をみせた。しかし、『華語萃編』に文法面についての記述がないことや鈴木の回想にある教授法への反省にもあらわれているように、坂本が述べた「語学的に考えて見る」という視点から中国語を捉えて教える姿勢はなかったといえる。

上記に挙げた鈴木、坂本、魚返、石田は、後に中国語の専門家となった人物であり、その他多くの学生と比べればやや特別な見方となるかもしれない。では、中国語プロパーとはならなかった一般の学生は、どのような感想を抱いていたのだろうか。

藤田佳久氏が行った同校卒業生へのアンケート調査<sup>54</sup>の中に「書院における中国語教育のすぐれている点」という質問がある。この設問に対する最多回答は、「寮内で上級生による発音練習」(46/311回答)というものであった。これは「念書」と呼ばれていた音読練習のことである。注意しなければならないのは、これが学校規定の教育活動ではないということである。

<sup>50</sup> 高見澤孟「新・はじめての日本語教育2：日本語教授法入門」アスク語学事業部、2004年、151頁。

<sup>51</sup> 前掲「鈴木沢郎氏に聞く」、51頁。

<sup>52</sup> 石田武夫(1907生)。香川県出身。東亜同文書院第26期生、商務科。建国大学教官、塾頭を経て戦後は京都大学嘱託、滋賀大学教授、福井工業大学教授として中国語教育に従事した。

<sup>53</sup> 石田武夫「同文書院における中国語教育の独自性」『滬友』第58号、滬友会、1990年、44頁。

<sup>54</sup> 藤田佳久「東亜同文書院卒業生の軌跡」『同文書院記念報』Vol.9、愛知大学東亜同文書院大学記念センター、2001年。



東亜同文書院の課外学習の風景（『東亜同文書院卒業写真帖』第25期、1929年）  
「念書」の様子を撮影したものであろう。校内の中庭などで音読練習が行われた。

新入生は入学してからの一学期の間ほど<sup>55</sup>、学生によっては12月頃まで<sup>56</sup>、朝30分程度、夕食後にも1時間半から2時間程度、上級生に発音指導を受けたり、あるいは自分で教科書の音読練習を行ったりした<sup>57</sup>。鈴木沢郎は「確かにあの方法はいいと思うんです」<sup>58</sup>と評価しており、正課に準ずるものとして学生に行かせたと語っている。

しかし、教員が指導するわけではない課外学習「念書」が、卒業生へのアンケートで東亜同文書院中国語教育の特徴として評価をうけていることは、授業だけでは解決されない教授上の問題があ

ったことを示しているのではないだろうか。

中国人教員による授業でのヒアリングの機会があっても、50人余りという多人数講義ではスピーキングの練習が十分に行うことができなかつたと思われる。そして、この問題点を補うのが「念書」であったのであろう。もちろん、それは日本人同士あるいは学生個人の発音、朗読練習なのであり、教科書の文章を暗記しなめらかに話すことができるようにはなっても、それがそのまま中国人との中国語でのコミュニケーション訓練とはならない。

<sup>55</sup> 鈴木沢郎は念書が行われた期間について、「四月に入ってきて夏休みまでは一生懸命やるが、夏休み後は、あまり夏休み前ほどじゃなくなるね。」と述べている（前掲「鈴木沢郎氏に聞く」、25頁）。

<sup>56</sup> 坂本一郎は、「毎日朝と晩テキストを百回位読んでいた。この伝統は終戦まで続き熱心な者は12月になっても“院子”の電灯の下で夜遅くまで“念課本”をしていた。」（坂本、前掲文、165頁）、と述べている。

<sup>57</sup> 藤田、前掲文、29頁。

<sup>58</sup> 前掲「鈴木沢郎氏に聞く」、25-26頁。



こうした問題を抱えつつも、東亜同文書院の中国語教育は中国で活動し得る人材を輩出していく。前掲の藤田アンケートの「書院在学中の中国語マスター状況」という項目では、378回答中229回答が中国語習得について肯定的評価をしており、これに「一部だけ」しか習得できなかったとした90回答を加えると全体の8割が中国語習得について成果があったことを認めている<sup>59</sup>。中国語の専門家である鈴木と魚返から厳しい評価をうけるような中国語教育が、一方では良好な成果を上げているのはどうしてなのだろうか。

その要因としては、まず東亜同文書院が中国で活動するための人材養成を目的として設立されたという性格上、入学者自身の中国語学習意欲がもともと高かったという点があるだろう。それに加えて重要な要因として考えるのが「大旅行」<sup>60</sup>と呼ばれる課程の存在である。

「大旅行」とは東亜同文書院で課せられていたフィールドワークのことで、卒業年次の学生は7、8名からなるグループ毎に夏季の2、3カ月ほどの間、中国各地の社会、経済、文化などを調査した。平時の授業は、坂本一郎が戦後の神戸外国語大学と比べて「神戸外大中国学科に法経商と中国事情の課目をふやしたようなもの。」<sup>61</sup>、と述べた東亜同文書院の教育課程の中で、引率者もなく学生だけで中国を「大旅行」というのは、きわめて特徴的なものであった。

当然、学生にはこれを実行しうる中国語の力が求められることになる。当時の中国は政治的にも社会的にも混乱しており、そこを学生だけで旅行することは危険をとまなうものであった。そうし

た旅行を実行し得る中国語の力を培うことは、学生にとって単なる課程中の一科目の学習を超えた身近で切実な課題であったに違いない。また、「大旅行」においてどこで何を調査するのか、といった具体的な目的が設定されることにより、必要となる表現もある程度は想定できたはずであり、漠然と中国語を学ぶよりも実用的な表現の習得が目指され、同時に効果的に学習できたのではないだろうか。

つまり、この「大旅行」と組み合わせられることによって、もともと学習意欲が高い学生の中国語学習の動機付け、学習内容が明確化され、結果として良好な成果をもたらしたと考えられるのである。

そして、「大旅行」での中国語によるさまざまなコミュニケーションという実践を通して、学生は自身の学習成果あるいは現状を実感することができ<sup>62</sup>、それが前掲坂本のような客観的な自己評価を促し、個人よってはさらなる学習意欲へともつながったのであろう。また、「大旅行」実施以前から規模は及ばないもののその原型といえる活動が行われており<sup>63</sup>、同様の効果があったと推測される。

### 3. 語学的研究とそれにもとづく新たな中国語教育

そうした東亜同文書院の中国語教育は、卒業生の一人である倉田俊介氏<sup>64</sup>が、「中国人と同じように中国語は使えなかった。」<sup>65</sup>、「しゃべっても、分かってくれたのかくれないのか分からない」<sup>66</sup>、と述べたような限界がありつつも、同時に、「面

<sup>59</sup> 「書院在学中の中国語のマスター状況」について、「マスターできた」28名、「まずまず」106名、「なんとか」95名、「一部だけ」90名、「できなかった」33名、「不明」22名（藤田、前掲文、36頁）。

<sup>60</sup> 「大旅行」については、藤田佳久氏の『東亜同文書院中国大調査旅行の研究』（大明堂、2000年）などの研究に詳しい。

<sup>61</sup> 坂本、前掲文、165頁。

<sup>62</sup> 東亜同文書院で学んだ中国語が「大旅行」中どの程度通用したのかということについて、前掲藤田アンケートによれば、回答数163に対して、「大体通じた」77回答、「十分通じた」13回答、「官吏には十分通じた」3回答、「どうにか通じた」13回答という肯定的なものが半数以上を占めている（藤田、前掲「東亜同文書院卒業生の軌跡」、42頁）。

<sup>63</sup> 「大旅行」は第5期生によって1908年から実施されているが、規模こそ異なるものの第1期生から中国国内での旅行がすでに行われている（藤田佳久『中国との出会い』第1巻、大明堂、257-276頁）。



白いもんだなあ、同文書院の北京官話というのは全国に通ずるんだな。」<sup>67</sup>、というような実務的に使える中国語の能力を育んだ。それは前掲坂本の「聞く」「話す」「読む」はできるが「語学」としては自信がないという自己評価を生じさせたような実用面をとりわけ重視した教育の結果である。

このことは教材にもあらわれており、『華語萃編』の実体は会話例文集であったし、東亜同文書院が発行した中国語教材の多くも実用的な表現を集めた例文集であった<sup>68</sup>。

こうした実用重視の傾向をもつ中国語教育は、東亜同文書院のごく初期からみられるものである。

1902年（明治35）入学の第2期生である小路真平<sup>69</sup>と茂木一郎<sup>70</sup>は、450句の「常言」つまり諺に関する用例文とその対訳を収録した中国語教材『北京官話常言用例』<sup>71</sup>を驚くべきことに在学中に執筆しているのだが、該書の目的について、「説話を華麗にし明亮にし且其意義を強からしむる」<sup>72</sup>、と述べている。つまり、著者は多くの諺を使

えるようになることが中国語の上達なのだと考えていたのである<sup>73</sup>。ここには中国語がどのような言語なのであるのか、というような語学的な関心はことさらなく、自分が必要とする表現をひたすら習得していくという実用的な視点しかない。さらに茂木が卒業後に東亜同文書院の助教授に就き後輩の指導にあたっていることを考えれば<sup>74</sup>、そうした中国語観こそが東亜同文書院の中国語であったといえるだろう。

しかし、1918年（大正7）に東亜同文書院が中国に関する研究を行う支那研究部<sup>75</sup>を設置して研究機関としても発展していくにしたがって語学的な視点からの中国語への取り組みがみられるようになる。支那研究部内におかれた華語研究会所属の中国語教員によって、中国語辞典の編纂作業がすすめられるなど中国語研究が本格的に行われるようになったのである。

支那研究部紀要『支那研究』や華語研究会機関誌『華語月刊』誌上に発表された研究成果には、もちろん会話や実用文書の例文蒐集的なものもあ

<sup>64</sup> 倉田俊介（1921-）愛知県出身。刈谷中学校卒業、1941年（昭和16）東亜同文書院大学入学（第42期）。1943年（昭和18）学徒出陣、中国各地で参戦。日本敗戦後は日商産業株式会社（現日商岩井）勤務。また、1976年（昭和51）には東亜同文書院卒業生同窓会組織滬友会幹事に就任（倉田俊介述「私の東亜同文書院大学時代」『同文書院記念報』Vol.17、愛知大学東亜同文書院大学記念センター、2009年）。

<sup>65</sup> 倉田、前掲文、40頁。

<sup>66</sup> 同註、27頁。

<sup>67</sup> 同註、28頁。

<sup>68</sup> 青木喬『支那時文類編』（東亜同文書院、1918年4月）、同『支那時文類編』（東亜同文書院、1928年3月）、青木喬『現代支那尺牘教科書』（発行者、発行時期記載なし。「第二学年岡村正文、大正十年第二学年二学期より」との筆記あり）、同『現代支那尺牘教科書全』（東亜同文書院、1924年5月）、清水董三『北京官話旅行用語』（東亜同文書院、1925年3月）、熊野正平『北京官話旅行用語』（東亜同文書院支那研究部、1925年3月初版、1933年12月改訂5版、1936年3月改訂6版、1941年4月9版）、福田勝蔵『商業尺牘教科書』（東亜同文書院支那研究部、1933年2月）、福田勝蔵編『商業応用文件集』（東亜同文書院支那研究部、1934年4月）。このうち『北京官話旅行用語』以外は書面語の用例集である。

<sup>69</sup> 小路真平（1883-1921）徳島県出身。東亜同文書院第2期生、商務科。天津中和洋行、大倉商事勤務（前掲『東亜同文書院大学史』1982年、406頁）

<sup>70</sup> 茂木一郎（1884-1966）群馬県出身。東亜同文書院第2期生、商務科。三菱商事に入り、天津、漢口、横浜各支店長。日本ソルデット会社常務取締役を経て中支那振興調査部長、中華塩業公司顧問（前掲『東亜同文書院大学史』1955年、172頁）。

<sup>71</sup> 小路真平、茂木一郎『北京官話常言用例』文求堂書店、1905年。

<sup>72</sup> 同註、3頁。

<sup>73</sup> 『北京官話常言用例』自体が東亜同文書院で使われたという記録はないものの、『華語萃編』以前に東亜同文書院で使用されていた御幡雅文『華語跬歩』にも「常言」と題する章があることから「常言」を用いた練習が学内で行われていたようである。

<sup>74</sup> 山口啓三『追憶』『滬友』第22号、滬友会、1967年、4頁。

<sup>75</sup> 東亜同文書院支那研究部、1918年（大正7）に設置された中国研究を行う学術研究機関。その研究成果は、『東亜同文書院支那研究部パンフレット』や紀要『支那研究』上に発表された。大学昇格後は東亜研究部と改称された。

るが、次にあげるような発音や音声、文法、方言など語学的な内容のものも数多い。

(音声・発音関係)

志綱「中華国語標準音的問題」『華語月刊』第2号、1928年。

志綱「華語標準音助詞『啊』の随韻衍声」『華語月刊』第3号、1928年。

熊野正平「華語破音弁」(一) - (三)『支那研究』第16 - 17、20号、1928 - 1929年。

志綱「中華国音字母底制定与公布」(上)(下)『華語月刊』第5 - 6号、1929年。

熊野「助詞『的』の紐音化に就いての言語学的音声学的研究」『華語月刊』第5号、1929年。

康友「重念の研究」(一) - (六)『華語月刊』第6 - 11号、1929 - 1930年。

志綱録「中華国音字母小史」『華語月刊』第7、9号、1929年。

志綱「華語声調問題」『華語月刊』第10 - 11号、1929 - 1930年。

志綱「中国国語羅馬字之制定」(一) - (六)『華語月刊』第12 - 17号、1930 - 1931年。

齊煦「華語与漢字の声音變遷」『支那研究 - 東亜同文書院創立三十周年記念論文集』第22号、1930年。

志綱「『石』和『千』的語音」『華語月刊』第18号、1931年。

志綱「關於『石』字的讀音」『華語月刊』第19号、1931年。

熊野正平、関宗瓊「華語破音弁」(一) - (三)『華語月刊』第29 - 32号、1933 - 1934年。

程樸洵「北平話音声与腔調兒之變化」第55、57 - 58、64、67号、1936 - 1937年。

坂本一郎「支那語動詞の具体性」『華語月刊』第81号、1939年。

鈴木沢郎「拉丁化中国新文字」(其一) - (三)『華語月刊』第85 - 87号、1940年。

鈴木沢郎「拉丁化新文字か注音符号か」『華語月刊』第88号、1940年。

坂本一郎「北京語第二声と日本字音」『華語月刊』第94号、1941年。

坂本一郎「入声と北京四声」『華語月刊』第95号、1941年。

内山正夫<sup>76</sup>「支那語音声学研究的必要性」『華語月刊』第97号、1941年。

坂本一郎「北京語第五声」『華語月刊』第98号、1941年。

内山正夫「支那語音声研究の態度に就いて」『華語月刊』第98号、1941年。

鈴木沢郎「ㄐのㄨの音」『華語月刊』第100号、1941年。

内山正夫「四声に就いて」『華語月刊』第100-101、105号、1941-1942年。

坂本一郎「日本語と四声」『華語月刊』第105号、1942年。

内山正夫、仲子(鄭仲和)「『語調』について」『華語月刊』第108-109号、1942年。

編輯「内山先生の『語調について』」『華語月刊』第111号、1943年。

木田弥三旺「北京語の四声變化に関する一考察」『華語月刊』第112-113号、1943年。

「支那語音韻組織表」『華語月刊』第117

<sup>76</sup> 内山正夫は内山雅夫のことと思われる(松田かの子、前掲「『華語月刊』と東亜同文書院の中国語教育」、155頁)。内山雅夫は東亜同文書院第34期生、戦後は愛知大学教授となっている。



号、1943年。  
「本羅馬字表音式の約束事」『華語月刊』  
第117号、1943年。  
内山正夫「華語月刊の新羅馬字表音式」  
『華語月刊』第117号、1943年。

#### (文法関係)

熊野正平「支那語に於ける論理的範疇  
と文法的範疇」(一) - (二)『支那  
研究』第21、38号、1930 - 1935年。  
旭光「複音的形容詞」『華語月刊』第  
14、16号、1930-131年。  
鈴木沢郎「陪伴詞の研究」(其一) - (其  
五)『華語月刊』第24 - 28号、1933年。  
俊傑「『兒』字的研究」『華語月刊』第24号、  
1933年。  
関宗瓚著、坂本一郎註「關於『你我他』  
的呼称」『華語月刊』第35 - 36号、  
1934年。  
程樸洵著、野崎駿平註訳「有這麼樣兒  
幾種不合文法的中國話」(其一) - (其  
三)『華語月刊』第45 - 47号、1935年。  
熊野正平「支那語研究瑣談 - 接尾語  
『子』と『兒』の繊細なる意味上の異ひ」  
『華語月刊』第48号、1935年。  
熊野正平「支那語文法学序説」『華語月  
刊』第50号、1939年。  
鈴木沢郎「初等華語拉雜集」『華語月刊』  
第67 - 76、78、82、90、92 - 94号、  
1937 - 1941年。  
熊野正平「被動式表現に用ひらる『被』  
『叫』『見』等の詞性に就いて - K、  
H氏の質問に答ふ」『華語月刊』第  
72号、1938年。  
熊野正平「簡易支那語文法講話」(序説)  
- (三)『華語月刊』第72 - 73、75  
号、1938 - 1939年。  
坂本一郎「江南平野の方言について」

(一) - (六)『華語月刊』第76 - 82号、  
1939 - 1940年。  
熊野正平「接尾辞『兒』に就いて - -  
閑説『子』『頭』」『華語月刊』第89号、  
1940年。  
臨茫著、坂本一郎註「動字弁略」『華語  
月刊』第94-95号、1941年。  
臨茫「副詞的区分」『華語月刊』第96号、  
1941年。  
伸一「文法雜記」(一) - (三)『華語月刊』  
第99 - 101号、1941年。  
熊野正平「副詞性付加語の位置研究」『華  
語月刊』第100号、1941年。  
山口左熊「臨別贈言」『華語月刊』第  
104号、1942年。  
山口左熊「雜俎會筆記」『華語月刊』第  
106-107、110-111号、1942-1943年。

#### (方言関係)

東亜同文書院支那研究部編「廣東語声  
音字彙」東亜同文書院支那研究部パ  
ンフレット、1926年(未見)。  
東亜同文書院支那研究部編「中国方言  
音彙調査」東亜同文書院支那研究部  
パンフレット、1927年(未見)。  
熊野「華語方言学概論」『華語月刊』第  
4号、1928年。  
影山巍「上海に於ける言語」『支那研究』  
第18号、1930年。  
坂本一郎「蘇州方言について」『支那研  
究』第46号付録、1937年(未見)。  
坂本一郎「江南平野の方言に就いて」  
(一) - (六)『華語月刊』第76 -  
77、79 - 82号、1939 - 1940年。  
坂本一郎「研究旅行報告 蘇州方言  
字音及声調」『支那研究』第52号、  
1939年。  
坂本一郎「即墨方言音韻語彙」『支那研

- 究』第54号、1940年。
- 坂本一郎「青島方言概説」(一) - (三)『華語月刊』第89 - 91号、1940年。
- 坂本一郎「日本語に似た上海語」『華語月刊』第93号、1941年。
- 坂本一郎「新聞雑誌で見受ける上海語」『華語月刊』第96号、1941年。
- 坂本一郎「上海語重要語詳解」(一) - (七)『華語月刊』第99 - 103、105、106 - 109、113号、1941 - 1943年。
- 坂本一郎「現代上海方音並に私案注音音符号」『支那研究』第60号、1941年。
- 坂本一郎「所謂国語と上海語」『華語月刊』第101号。
- 坂本一郎「貴陽方言に就いて」『華語月刊』第102号、1942年。
- 坂本一郎「貴陽方音に就いて」『支那研究』第61号、1942年。
- 坂本一郎「西安方言に就いて」『華語月刊』第106号、1942年。
- 坂本一郎「西安方言に就いて」『東亜研究』第63号、1942年。
- (中国語教育全般・その他)
- 清水董三『支那の国語統一問題』東亜同文書院支那研究部パンフレット、1922年。
- 志綱「中華国語教育底新設施」『華語月刊』第4号、1928年。
- 康友「注音字母読本講義」/「新国語読本」/「新国語読本」/「国語新読本講義」/「国音新読本講義」『華語月刊』第4 - 6、9 - 11号、1928 - 1930年。
- 志綱「中国的新文学和国語」『華語月刊』第8 - 9号、1929年。
- 熊三児「支那語を学ぶ者の為めの言語学浅学説」『華語月刊』第10号、1929年。
- 「中国国語教育新聞」『華語月刊』第12号、1930年。
- 康友「国語教科書講義」『華語月刊』第13-24、26-29号、1930-1933年。
- 影山巍「支那の国語統一問題」『支那研究』第27号、1931年。
- 志綱「中国語的演化」『華語月刊』第18、20 - 23号、1931-1932年。
- 康友「『伝式教授法に就いて』を読む」『華語月刊』第19号、1931年。
- 王化著、坂本一郎註「我對於華語教學的管見」『華語月刊』第32号、1934年。
- 程樸洵著、坂本一郎註「日本人の研究華語的容易疏神而錯誤的幾点」(一) - (六)『華語月刊』第35 - 40号、1934年。
- 程樸洵著、鈴木沢郎訳注「近四十年來中華国語變化之大略」(其一) - (其六)『華語月刊』第48 - 50、52 - 54号、1935 - 1936年。
- 坂本一郎「琉球の支那語」『華語月刊』第82号、1940年。
- 山口左熊「中国語變遷考」(一) - (五)『華語月刊』第83-85、87-88号、1940年。
- 坂本一郎「多念・多聽・多説『多想』!」『華語月刊』第92号、1941年。
- 山口左熊「言語への手引き」『華語月刊』第100、102号、1941-1942年。
- 内山「中等学校支那語教育の実施状況に関する一調査」『華語月刊』第106号、1942年。
- 木田「ハナシコトバとカキコトバ」『華語月刊』第116号、1943年。

こうした語学的な取り組みは研究という学術的な面だけでなく教育活動においてもみることができる。華語研究会の一員鈴木沢郎が1934年(昭和9)に出した『標準支那語教本初級編』<sup>77</sup>は、

文法的側面にも配慮がされている点が特徴的な教科書である。その例言には次のようにある。

会話編に於ては主として学習者をして支那語の形態を知らしめ、作語の法則を会得せしむるに意を注ぎ、之を十四の形式に帰納し、一々文法表解を付したり。<sup>78</sup>

この「文法表解」全14項目の内、(1)と(14)をみてみよう。

【参考】文法表解(1) —正則—

主語	述語
花兒	開
太陽	出來了
人	都睡覺了

<sup>79</sup>

【参考】文法表解(14) —同格語あるもの—  
支那語に於ける文の構成は以上に挙げた十三の形式以外、同格語有る場合には次の二種の構造を有する文がある。

一、同格主語あるもの。

同格主語	主語	述語	補足語
空氣	這個東西	是	一時也不能缺少的
太陽光	他	也是	如此

【例】

電氣，他是很有用的。  
商業，他是我們的職業。  
王先生，他也很願意如此。  
用功，這是很要緊的事情。  
酒，這是害人(一)人的東西。

二、同格賓語あるもの。

同格賓語	主語	述語	賓語
吃的	我們	應該努力種	他
穿的	我們	應該努力織	他
住的	我們	應該努力蓋	他

【例】

點心，買他兩毛錢罷。  
這本書，我喜歡看他。  
大自然，我們應該感謝他。  
像他那樣兒的人，管他幹什麼？  
中國舊社會的女子有三從：從父，從夫，從子。<sup>80</sup>

この教科書は旧制中学校、実業学校向けのものであり、東亜同文書院で使われたものではない。しかし、教員である鈴木が中国語を教えるに際して文法面から理解させることを試みていることは注目されよう。なぜならば、それは勤務校での授業にも反映されたものと思われるからである。

実際、東亜同文書院では文法についての授業が行われていた。教員の一人熊野正平<sup>81</sup>が1935年(昭和10)に出した中国語文法書『支那語構造の公式』<sup>82</sup>の自序で次のように述べている。

私が斯ゝる支那語構造の型態公式の編成を思ひ立つたのは、も早七八年も以前のことである。それは支那語がもと単音単綴語であつて、語尾変化と云ふが如きものもなく、又従來の文法書に於けるが如く『詞』を本位とせず、『語』を本位として考ふる時、成分も極く僅かで比較的総合的處理に便利であること等から思ひ着いたことであつた。〔中略〕終にいよいよ此型態公式達成を志しその業に従つたのである。而して其一部は既に數

<sup>77</sup> 鈴木沢郎編『標準支那語教本初級編』東亜同文書院支那研究部、1934年3月初版、1934年5月再版、1935年3月3版、1936年3月4版、1937年2月改訂5版、1938年6版。

<sup>78</sup> 同註、例言1頁。

<sup>79</sup> 同註、32頁。

年来本院学生に課せる文法教課本に採録し、殊に昨夏徳島県立光慶図書館主催の支那語講習会に講師として聘せられ、全く初学の講習生に此公式応用に拠る支那語教授を施して予期以上の効果を収め得たる<sup>83</sup>〔下線は引用者〕

下線部にあるように、熊野は「文法教課本」なるものを用意していたという。教科書があるということは講義にも使用されていたに違いない。「文法教課本」自体は未見であるが、上掲文によれば『支那語構造の公式』の原型的なものであったと思われ、これによって東亜同文書院の文法講義の一端を知ることができる。

『支那語構造の公式』は中国語の構造を示すにあたって、用語を次のように規定している。

本型態公式作成に当つて採られた成分は「語」を単位として

1. 主語 (人走)
2. 述語 (人走)
3. 賓語 (直接、間接) (我吃飯; 我給你錢-錢=直、賓, 你=間賓)
4. 補足語 (他是人)
5. 形容詞性付加語 (形、付) (許多的人往西一直的走)
6. 副詞性付加語 (副、付) (許多的人往西一直的走)

及び別に

7. 介詞 (我把他打)
8. 連詞 (我和他……)
9. 助詞 (人走了)

の九者である。助詞は「語気」を表すのみで構文型態に内面的に關する所はない。従つて特に其が為に公式数を増すことは省略に従つた。<sup>84</sup>

これらの用語によって中国語の構造が説明されていくのであるが、それがどのようなものであるのかをその目次を引き参考に資す。

#### 単句

- 基本型 (一) 主語…述語
  - 基本型 (二) 述語…主語 (基本型 (一)、変格)
  - 基本型 (三) 主語…述語…補足語
  - 基本型 (四) 主語…述語…賓語
  - 基本型 (五) 主語…介詞…賓語…述語
  - 基本型 (六) 介詞…賓語…主語…述語
  - 基本型 (七) 主語…述語…賓語…助動詞…補足語
  - 基本型 (八) 主語…述語…間賓…直賓
  - 基本型 (九) 主語…介詞…直賓…述語…間賓
- 複成分単句

#### 複句

- (一) 並立句
  - 一、連詞を用ひざるもの
  - 基本型 (主部…述部) + (主部…述部)
  - 二、後分句にのみ連詞あるもの
  - 基本型 (主部…述部) + (連詞…主部…述部)
  - 三、分句各々連詞を用ふるもの

<sup>80</sup> 同註、113-114 頁。引用文中の字の上に附いている「一」は重念(重誦)を示す。

<sup>81</sup> 熊野正平(1989-1982)。徳島県出身。東亜同文書院第17期生、商務科。北京大学中国文哲学科修了。東亜同文書院教授、同大学教授を経て1942年(昭和18)より東京商科大学専門部に移り、後一橋大学教授、東亜学院院長、二松学舎大学教授。経済学博士。著書に『熊野中国語大辞典』(三省堂、1984年)、『中国標準語教本』(三喜堂、1941年)がある。

<sup>82</sup> 熊野正平『支那語構造の公式』東亜同文書院支那研究部、1935年。熊野は後に『現代支那語法入門』語学文庫(三省堂、1942年)、『現代中国語法入門』(三省堂、1948年)、『熊野現代中国語法論』(三省堂、1989年)という文法書を著している。

<sup>83</sup> 熊野、前掲書、自序1頁。

<sup>84</sup> 同註、自序につづく頁番号が振られていない頁。



基本型（連詞…主部…述部） + （連詞…主部…述部）

(二) 主副句

一、副句前に置かれ主副句共に連詞を用ふるもの

基本型（連詞…主部…述部） + （連詞…主部…述部）

二、副句（その句首のみに連詞ある）前に置かれたるもの

基本型（連詞…主部…述部） + （主部…述部）

三、副句（連詞ある）が後に置かれたるもの

基本型（主部…述部） + （連詞…主部…述部）

四、副句（連詞無き）前にあるもの

基本型（主部…述部） + （主部…述部）

(三) 子母句

一、子句が母句の主語の形容詞性付加語位に置かれたるもの

基本型（主部…述部…介詞「的」） + 主部…述部

二、子句が母句の賓語の形容詞性付加語位に置かれたるもの

基本型 主部…述部…主部…述部…的…賓語

三、子句が母句の補足語の形容詞性付加語位に用ひられたるもの

基本型 主部…述部…主部…述部…的 + 補足語

四、子句が母句の述語の副詞性付加語位に置かれたるもの

基本型 主部…主部…述部…的 + 補足語

五、子句が母句の主語位に置かれたるもの

基本型 主部…述部…述部

六、子句が母句の賓語位に置かれたるもの

基本型 主部…述部…主部…述部

七、子句が母句の補足語の位置に置かれたるもの

基本型 主部…述部…主部…述部

こうした項目からもわかるように、該書は整理された文法体系を提示している。自序の中で熊野は、「多念、多聴、多説」、すなわちたくさん読み、たくさん聞き、たくさん話す、ということのみがなされてきた中国語教育について、それも上達するためには必要不可欠なことではあるのだけれども、「多思」つまりよく考えることも重要であり、そのためにこの『支那語構造の公式』を著したのだと述べている。

こうした視点に立って中国語を捉えようとする内容が中国語授業で講じられていた可能性が強いということは、東亜同文書院の中国語教育が開学以来の実用表現の習得に偏ったものから変化しつつあったことを示すものであろう。

おわりに

東亜同文書院の前身である南京同文書院では、当時すでに中国語教育の主流から外れていた南京官話が教授されていた。しかし、北京官話を教えていた日清貿易研究所の幹部であった根津一が院長となったことから、上海に移転し東亜同文書院が成立すると北京官話による中国語教育が行われることになった。

そこでは中国人教員と日本人教員が連携する形で授業が行われていたもののークラス 50 名前後という多人数による講義形式であることから、「念書」と呼ばれる課外学習によって発音、スピーキング練習が補われていた。これによって会話例文集ともいえる『華語萃編』や教員が紹介する表現



を徹底的に覚えていくというきわめて実用的な学習が行われたのである。さらに、「大旅行」と呼ばれるフィールドワークによって中国語学習の動機付けが明確化されていたことも、この学校の中国語教育の特徴である。

こうした実用的表現の習得に特化した教育は、東亜同文書院が教育機関として充実、発展していくと共に次第に変化をみせはじめる。学内に中国語専門の研究部門華語研究会が設けられ中国語辞典の編纂や学術的な中国語研究が行われるようになると、『支那研究』や『華語月刊』といった同校発行誌には多数の中国語に関する研究成果が発表され、同時に語学的な解説を付した鈴木沢郎編『標準支那語教本初級編』や、本格的な文法書である熊野正平『支那語構造の公式』という従前の例文集的教科書とは一線を画す新しい教材が出版されるようになる。さらに、文法面を重視した中国語授業が行われるようになった。こうした学内での中国語研究、教育の発展は、ひたすら「多念、多聴、多説」するだけの東亜同文書院開校以来の中国語教育にとって大きな変化をあたえ得るものであった。

しかし、そうした動きは新たな中国語教育の可能性を示すだけものに終わる。学内は、1937年(昭和12)第二次上海事変での虹橋路校舎被災から学徒動員などの戦争の影響を受けるとともに、1939年(昭和14)の旧制大学昇格にともなう組織の改編整備などに迫られ、安定しているとは言い難い状況におかれるようになる。その中で中国語研究の中心であった『華語月刊』はインフレと物資不足の影響を受け1943年(昭和18)に第119号で休刊を余儀なくされた。それは、第117号で「簡単に解り易く覚え易く精密な注音も従来の諸方式に

劣らない」<sup>85</sup>というこの学校独自のローマ字綴りを定めた矢先の突然なものであった。

その後も東亜同文書院は上海において教育活動を行ったが、再び中国語教育、研究を活発にさせることはできず1945年の日本の敗戦とともに解散に追い込まれたのである。

以上、東亜同文書院内の中国語教育に焦点をあて考察をすすめてきた。しかし、同時期には学外にも中国語教育や研究の取り組みがあったのであり、そうした学外の動きと東亜同文書院のそれを相対化させることによって多面的に捉えることを今後の課題の一つとしたい。

また、東亜同文書院中国語教育の敗戦後の動向も今後の課題である。この学校の中国語教育の象徴ともいえるべき『華語萃編』は会話例文集の体裁のまま終戦を迎えた。しかし、旧東亜同文書院教職員が設立に関与した愛知大学では『華語萃編』が使用され、さらにその構成に倣いつつ新たに『中文会話教科書』<sup>86</sup>が編まれ<sup>87</sup>、愛知大学だけではなく旧教員の赴任先の他大学でも使われたのである<sup>88</sup>。このように東亜同文書院の中国語教育は戦後においても存在していた。旧教職員が戦後も中国語教育、研究に従事していたことについては、すでに松田かの子氏が、「東亜同文書院の研究・教育に対する姿勢は、廃校後も個人レベルで受け継がれ、戦後の中国研究及び中国語研究・教育の歩みを支えて来た。」<sup>89</sup>と述べて東亜同文書院の中国語教育が現在にもつながる意味をもつことを示唆しているが、それらが戦後の中国語教育、研究の場においてどのような働きを為したのか、何が受け継がれたのか、或いは姿を消したのか等、より具体的に把握する必要があるだろう。

<sup>85</sup> 内山正夫「華語月刊の新羅馬字表音方式」『華語月刊』第117号、1943年、14頁。

<sup>86</sup> 愛知大学華語研究会著『中文会話教科書』大安、1964年。

<sup>87</sup> 今泉潤太郎述「『華語萃編』から見た同文書院の中国語教学」『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』第1号、2006年、21 - 22頁。

<sup>88</sup> 佐藤晴彦「坂本一郎先生(1)」『中国語の環』第82号、日本中国語検定協会、2009年、4頁。

<sup>89</sup> 松田、前掲「『華語月刊』と東亜同文書院の中国語教育」、157頁。